



おがわまちの

# 民話と伝説



# 小川町の 民話と伝説

## 目次

- 一 四つ山の三つご石
- 二 でいだんぼう
- 三 埋ずまった陣太鼓
- 四 大 蛇
- 五 八幡神社のこい(上)
- 六 八幡神社のこい(下)
- 七 まめになった嫁さん(上)
- 八 まめになった嫁さん(下)
- 九 きつねの嫁入り
- 十 カラスの穴の伝説
- 一一 ボタモチどっこいしょ
- 一二 一つ足りない谷
- 一三 尻あぶり(上)
- 一四 尻あぶり(下)
- 一五 西光寺の不思議(上)
- 一六 西光寺の不思議(下)
- 一七 子育て地蔵
- 一八 ひじり地蔵
- 一九 えんのぎようじゃ(上)
- 二十 えんのぎようじゃ(下)
- 二一 重忠公のお墓
- 二二 七井戸
- 二三 池のつりがね
- 二四 もみじ山
- 二五 高 谷

# 一．四つ山の三つご石

むかし、むかしのおはなしです。四つ山のふもとに、三つ子の兄弟がおったと。そんで、何をすんにも三人はいっしょだったと。

ある天気の良い日、太郎兵衛が、四つ山の中腹にある石をめつけて、弟たちと言ったと。

「なあ、四太郎、太郎吉、これからこの石をもち上げて力だめしをすべえ。」

そして四太郎が言ったと。

「うん。おらやる。」

太郎吉も

「おらもやる。」

そこで三人は、八畳じきもある石をもち上げてしまったとき。これでもまだやめねえで、四太郎が言った。

「こんだあ石をもって、四つ山のまわりをまーるべえ。」

すると、あとの二人も「うん、そうすべえ。」

と言ったと。そんで石をかついで、四つ山のまわりを走り出したんだと。何回か回ったところ太郎吉が、

「おらあもうだんめだー。」

と言ったと。太郎吉が手をはなした瞬間、石が三つにぶっかけてしまったと。

これを見て四太郎が言った。

「この石は、おらたちと同じだなあ。」

三人とも

「三つご石だ。」

と言ったんだと。

こうして三つご石はできたんだとき。今でも三つご石は、四津山に残っています。

## 二. でいだんぼう

むかし、むかし、でいだんぼうという、それはそれは大きな男が旅の途中、定峰峠にさしかかりました。

もう日は沈みかかり、山はあかね色に染まろうとしていました。でいだんぼうは、まだ夕飯を食べていなかったの  
で、お腹がすいてきました。

「ああ、腹がすいた。このあたりで夕飯にするか。どれ、どっいしょ。」でいだんぼうは、笠をとり箕のをぬいでどっかと山に腰をかけました。でいだんぼうが笠をぬいでおいたその場所は笠山となり、箕のをぬいでおいたその場所は箕の山となりました。

夕飯のしたくをしようと、ふと下のほうを見ると、きれいな水が流れていました。でいだんぼうは、それを見るところにいっぱい水をふくんで、ブーツと山に向かって吹きつけました。

すると、どうでしょう。その山に、たちまち霧がかかってしまいました。この霧がかかった山は、大霧山となりました。

それから、でいだんぼうは火を燃やして、ぐつぐつと粥を煮はじめました。なにしろお腹がすいていたのですから、できあがると待つひまもなく食べはじめました。

お腹がいっぱいになったでいだんぼうは、すっかり気げんがよくなりました。元氣も出てきました。「えいっ」とばかりに、持っていたはしを大地につきました。

粥を煮た所が粥新田峠となり、二本のはしを立てたその場所は二本木峠となりました。

しばらく休んで、今度は、あとかたづけをはじめました。粥を煮た釜を、荒川の水できれいに洗い、釜を伏せて

おきました。釜かまを伏ふせたその場所ばしょは、釜かま

伏ふせ山やまとなりました。そして、でいだん

ぼうは、ドスン、ドスンと山やまを越こえて信しん

州しゅうへと向むかって行いきました。

### 三．埋うずまった陣太鼓じんたいこ

むかし、むかし、下里しもさとの割谷わりやというところの奥おくに、城山しろやまという山やまがありました。

そこには北条氏ほうじょうしの城しろがありました。

ある時とき、北条氏ほうじょうしと上杉氏うえすぎしの戦たたかいがあ

りました。そのいくさは、大變悲惨たいへんひさんなもので、山やまには、死人しにんやら、刀かたなやら陣太鼓じんたいこ

やら、辺りあた一面いちめんに散らばって、それはもう

言いいようのないありさまでした。

おまけに、城しろまでくずれおちてしまったのです。

それを見た村人むらびとたちは、

「こりゃあ、すげえいくさだったんだなあ。これじゃあ、かわいそうだ。みんなで埋うめてやろうじゃあねえかい。」

と、口々くちぐちに言いいました。

そして、山やまの頂上ちやうじやうに死人しにんや刀かたなや、

陣太鼓じんたいこを埋うめて供養くやうしてやりました。

何年なんねんかたったある日ひ、村人むらびとが山やまに木きを

切きりに登のぼりました。

歩いていくうちに、足袋たびに土つちがついて

しまったので、足袋たびについた土つちをおとそ

うと思おもい足あしぶみをしました。

すると、「ドンドン、ドンドン」とい

う音おとが聞きこえてきたのです。不思議ふしぎに

思おもった村人むらびとは、何回なんかいも足あしぶみをしまし

た。足あしぶみをするたびに、「ドンドン、

ドンドン」と、まるで太鼓たいこをたたいてい

るようです。村人むらびとは、村里むらさとに帰かえってからその話はなし

をしました。それを聞きいた村人むらびとたちは、

「それは、きっとそこに埋うめた陣太鼓じんたい

鼓この音おとだろう」

と、うわさになり、後々のちのちまで語かたり継つが

れたとのことでした。

## 四・大蛇

むかし、山のふもとの小さな家に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある年の七月の初めの大変暑い日のことでございます。

おじいさんは、朝飯を食べて山仕事に出かけました。山は緑がとてもきれいでした。

おじいさんは腰をのびして、

「ああ、疲れた。どれここで一休みするべえか。どこかにいい場所はねえかな。」と、あたりを見回しました。

「おお、あそにちょうど良さそうな木があったわい。」

おじいさんは、すわり良さそうな松の木の根を見つけました。おじいさんは、鎌をちよいと根にさし「よっこらしよ」といながらその根に腰をかけました。

するとどうでしょう。すわっている根が、もくもくと動きはじめたではありませんか。

驚いたおじいさんは、まっ青になって声が出ませんでした。なにかと思っ  
てみると、なんと、それは大蛇だったのです。おじいさんは、あわてて、家まで走って行きました。

まっ青な顔のおじいさんを見ておばあさんは、「おじいさんや、おじいさん、どうしたんだい。」と尋ねました。ところがいじいさんは、あまりにも早く走ったので、目をあけたまま何も答えません。息をすることだけでせいっぱいだったのです。しばらくして、急に大きく息を吸ったかと思うと、おじいさんはそのまま死んでしまいました。

それからというものの村人はこの山には何かのたたりがあると云われ、誰一人として山に行こうとする人はありませんでした。そして、今でもその大蛇は見つかっていません。

このおじいさんの死んだ日は、現在の  
七夕の日にあたります。そこでこの  
日には、誰もが仕事を休む習慣ができた  
ということです。

## 五. 八幡神社のこい (上)

むかし、こいを食<sup>た</sup>べると悪<sup>わる</sup>いことが起きるといわれていたところのお話<sup>はなし</sup>です。

上横田<sup>かみよこた</sup>というところに、じん兵<sup>べい</sup>さんというお百姓<sup>ひやくしやう</sup>さんがいました。ある年の夏<sup>とし なつ</sup>、雨<sup>あめ</sup>が全然降<sup>ぜんぜんふ</sup>らず、暑<sup>あつ</sup>い毎日<sup>まいにち</sup>が続<sup>つづ</sup>きました。

田畑<sup>たはた</sup>はカラカラになり、川<sup>かわ</sup>の水<sup>みず</sup>や池<sup>いけ</sup>の水<sup>みず</sup>も、とても少<sup>すく</sup>なくなっていました。あした。

じん兵<sup>べい</sup>さんには、太郎<sup>たろう</sup>と二郎<sup>じろう</sup>というふたり<sup>ふたり</sup>の子<sup>こ</sup>どもがありました。ある日<sup>ひ</sup>、兄<sup>あに</sup>の太郎<sup>たろう</sup>が弟<sup>おとうと</sup>の二郎<sup>じろう</sup>に、

「神社<sup>じんじや</sup>へ行<sup>い</sup>って遊<sup>あそ</sup>ばねえか。」

といい、神社<sup>じんじや</sup>へ遊<sup>あそ</sup>びに行<sup>い</sup>きました。

池<sup>いけ</sup>のまわりで遊<sup>あそ</sup>んでいると弟<sup>おとうと</sup>の二郎<sup>じろう</sup>が急<sup>きゆう</sup>に、

「あつ、にいちゃん、見<sup>み</sup>てみなよ。あ

んなでつけえこいが泳<sup>およ</sup>いでいるよ。」

と、池<sup>いけ</sup>の中<sup>なか</sup>のこいを指<sup>ゆび</sup>さして言<sup>い</sup>いまし

た。すると、兄<sup>あに</sup>の太郎<sup>たろう</sup>は、とても魚<sup>さかな</sup>をとるのがうまかったので、大<sup>おお</sup>きなこいを取<sup>と</sup>ってみたいになりました。

「二郎<sup>じろう</sup>、こいつをつかまえてみようぜ。」

よ言<sup>い</sup>って、あつという間<sup>ま</sup>に、とうとうこいを盗<sup>ぬす</sup>んでしまいました。

「なあ二郎<sup>じろう</sup>、このことはだれにも言<sup>い</sup>っちゃあなんねえ、言<sup>い</sup>ったら怒<sup>おこ</sup>られっからな。わかったな。」

と話<sup>はな</sup>しながら家<sup>いえ</sup>に帰<sup>かえ</sup>っていききました。

帰<sup>かえ</sup>ってきた子<sup>こ</sup>どもたちが、大<sup>おお</sup>きなこいを持<sup>も</sup>っているのをみても驚<sup>おどろ</sup>いたじん兵<sup>べい</sup>さんは、

「太郎<sup>たろう</sup>、二郎<sup>じろう</sup>、そのこいはいったいどうしたんだ。」

と尋<sup>たず</sup>ねました。

## 六・八幡神社のこい (下)

はちまんじんじゃ

「父ちゃん、川でみつけたんだよ。川の水が少なくなつて、こいが泳げなかつたから、つかまえたんだよ。」と、うそをついてしまいました。

そのころは、食べ物がるくにありませんでしたので、じん兵さんは、うそでも知らず、池のこいを食べてしまいました。それから幾日かたつて、人々が待ちに待った雨が降ってきました。それが大変な大雨になってしまったのです。

じん兵さんの家の田畑は流されてしまいました。そんな時、水といっしょに、どこからともなく、こいがじん兵さんの家の中に流れ込んできました。

やがて雨がやみ、じん兵さんと子どもたちが川へ釣りにでかけたときのことでです。川のふちを歩いていた兄の太郎が足をすべらせて、川に落ちてしまいました。そして、太郎のまわりには、

こいが何匹もよってきた。

こうして幾日かの間に、悪いことばかり続いたので、じん兵さんは、「これはきつとあのこいを食べたせいだろう」と思い、子どもたちにほんとうのことを聞きました。

そして、神社に三人であやまりに行きました。それからは、悪いことはおこらなくなったということです。

## 七. まめになった嫁さん(上)

むかし、ある家いえに、ものぐさな娘むすめさんがおつたと。その娘むすめさんも年としごろになつて、お嫁よめさんに行つたと。

ところが、その家いえの姑しゅうとめさまは、その嫁よめがあんまりものぐさなもので、氣きにいらなかつたんだと。そこで嫁よめいびりをしたんだと。

嫁よめさんは、はじめのうちにあんまり氣きにしないでいたんだが、そのうちうんとひどいことをするようになったんで困こまりはててしまつたんだと。

そんである日ひ、とうとうがまんしきれなくなつた嫁よめさんは、仲人なこうどさんの家いえに行いつて、

「おらあ、なんにも悪いわることもしねえのに、姑しゅうとめさまはおらをいじめてばかりいる。どうしたらよかんべえ」と、ぐちをこぼしたと。

それを聞いた仲人なこうどさんは、

「ではいいことを教おしえてやろう。これ

から帰かえつたら、すぐに、すりばちの底そこをきれいにみがきなさい。毎日毎日、いっしょうけんめいみがくのですよ。そうすれば、姑しゅうとめさまは早死はやじにをしますよ。」  
といつたとき。

それを聞いた嫁よめさんは、さっそく家いえに帰かえつて、いわれたとおり、毎日毎日、すりばちの底そこをみがいたと。そして、早死はやじにするように、すりばちだけでなく、ちやわんやなべもみがいたんだと。

(注)「すりばちの底そこ」というのは、すりばちの外側そとがわのことで、よく洗あらい忘わすれることが多いのです。

## 八・まめになった嫁さん(下)

仲人さんから、すりばちの底をみがけ

ば姑 さまが早死にをすると聞いた嫁さん

は、毎日、毎日、すりばちの底をみがい

たと。そうするうちに、姑 さまの態度が

変わっていったと。

近所へ行っては、

「うちの嫁はいい嫁じゃ。ほんとにまめ

でよく働く。」

と、嫁のじまんをはじめたと。そして、

嫁いびりもしなくなり、だんだんやさ

しくなっていたと。

そんな姑 さまをみているうち、もの

ぐさ嫁は今度は心配になったんだと。そん

でまた仲人の家に行つて

「姑 さまは嫁いびりもしなくなつて、

やさしくなつただよ。おら、いままで姑

さまが早く死んでくれればと思つて、すり

ばちの底をみがいたんだけども、いまは

そんなこと思つてもいねえ。これからもす

りばちの底をみがくと、ほんとうに姑

さまは早死にするんだか？」

とたずねたんだと。

それを聞いた仲人は、たいへんよろ

こんで

「なになに、みがけばみがくほどよい

姑 になつてくれるわい。」

といつたと。

それを聞いた嫁さんは、安心して家

に帰つたと。そしてまめに働くように

なつて、とても仲のよい嫁と姑 にな

つたとさ。

## 九 きつねの嫁入り よめい

むかし、小川町おがわまちの下里しもさとというところに、

ごん兵さんべえというお百姓ひやくしやうさんがいまし

た。ごん兵さんべえは村むらでも評判ひやうばんの働きも

ので、いつも朝早くあさはやから夜遅くよるおそまで田畑たはた

の仕事をしごとしていました。きょうもいつもの

ように畑仕事はたけしごとを終えたごん兵さんべえは、家いえ

へ帰かえるところでした。

あいにく小雨こさめが降ふってきてあたりがぼ

うつとかすんで不気味ぶきみな予感よかんがしたので、

足を早あしはやめ、家いえへと急いそぎました。

すると、遠とほくにぼうつとあかりが見みえま

した。よく見みると、槻川つきがわの橋はしのあたりのよ

うです。それも一つひとつではなく、いくつもい

くつも見みえ、それはちようちんの光ひかりのよ

うですが、ぼやーつとしています。

そのあたりには、人ひとなど住すんでいない

し、人もあまり行いかないところでした。ご

ん兵さんべえは「ほたるだんべか？それにしは

あかりが太おおきすぎる。いったいなんだんべ

え」と、しばらくそこに立たちすくんでい

ました。すると、そのあかりが、ゆらゆらゆれながら、山やまのほうへと消きえていき  
ました。

正気しょうきにもどったごん兵さんべえは、いち

もくさんに家いえへかけこみました。そして

家の人いえひとたちに、自分じぶんでみた奇妙きみょうなこと

を話はなしはじめました。

「ばあさま、橋はしのそばから山やまのほうへ

消きえていく、ちようちんみてえな光ひかりを

いっぺえ見たみたけど、あれはなんだんべ

え」「ふうん。それはきつねさまにばか

されたんだんべえ。」と、ばあさまがい

いました。  
それから、ちよつと考かんがえてまた、ば

あさまがいました。  
「わしがじいさまに聞きいた話はなしだけん

ど、きつねはこういう日ひに嫁よめにいくんだ

と。だからおめえが見みたのは、きつねの

嫁入りよめいだったかもしれねえ」

それから、そのあかりのことを、きつ

ねの嫁入りよめいというのです。

## 十. カラスの穴の伝説

あな でんせつ

らくだのコブのような官の倉、石尊山が、霧に煙って見えないと

「ほれ、もうすぐ雨が降ってくるぞ」

そう地元の人は言いました。

その官の倉のふもとに、むかし「カラス

の穴」という鍾乳洞がありました。

人一人立って、やっと入れるくらいの穴

で、そこからすぐ深い井戸になっていまし

た。ためしに小石ほうりこんでも、ただ、

カラカラ…と音がすいこまれそうな不気味

な穴でした。

「さて、一体この底なし井戸のような穴は、

どこまで続いているか一つためしてみよ

う」

ある時、人々が集まって相談の結果、一羽

の鶏を井戸に投げこんでみました。

そして

「さあ、鶏はどこへ出るだろうか?」

人々は心あたりの方角へ飛び出したと

き。

哀れな鶏は、一体どこに出たと思いま

すか?ここからずっと西、折原のかまん洞に

出たと思えますか?どうしてどうして更に

西、鉢形の城の下をぬけ、流れも荒い荒川も

なんのその、象ヶ鼻というところに

「ケッコ、コケッコ、もうケッコウ」と飛び

出したということです。

この穴も、その後、山くずれや鉄砲水のため、

すっかり埋まってしまったそうです。

残念でしたね。

## 十一・ボタモチどっこいしょ

人は良いけれど少々オツムの弱い男の子があったと。

ある日、とつてもうまいボタモチを作ったので、おっかあは親類のばあさんに食べさせたくなったと。

それで男の子にボタモチをもたせてやるんだけど、むこうに行ったときの口上（あいさつ）を教えてやることにしたんだって。

「いいかえ。お前は、よその家に行っても、ろくに口上もいえないのだから、これからいうことをよくそらでおぼえてくんだよ。」  
「うんまいボタモチができたんで、もってきたよ」「こういうんだよ。」  
「うん、わかったよ、わかったよ。」

さて、男の子は重箱につめたボタモチをしっかり首っ玉にしばりつけて「ボタモチをもってきたヨ。ボタモチ…」  
と口でブツブツいいながら親類へ出かけた。

ところが途中で川があり、あいにく近くに橋がなかったのに  
「どっこいしょ。」  
と、またいだんだと。

それから一生懸命おばあさん家へ歩

て行って、とぼう（玄関）をくぐったとたん、  
「うんまい」どっこいしょ「もってきたヨ。」  
といったんで、親類のおばあさんは、まるでつかいボタモチがのどにつかえたように目を白黒したとき。

## 十二. 一つ足りない谷

竹沢地区は、たいへん谷が多いところ

です。まるで、くしの歯のように一の谷、

二の谷と幾つも谷が山あいを縫い、谷の奥

の小さな峠を越えると、隣りの字や隣りの

村のまた谷がすぐ下から向うに続いて見え

ることもあります。今は荒れてしまいまし

たが、田んぼが何枚も何枚もありました。

さて、むかし、むかし、まだこの辺に家な

んかちよつとしかなかったころ、一人の偉

いお坊さんが、どこからともなくやってき

て、小さなおり（粗末な小屋）と造って

熱心にお経を唱えたり、祈ったりしていま

お坊さんは、ゆくゆくここに立派なお寺

を建てたいと思っていました。静かなあた

りの山や、小高い丘、たくさんいりくんで

いる谷をくわしくしらべて、立派なお寺を

建てるのにふさわしい土地かどうか、毎日

あち、こち歩きました。特に谷が九十九

あるかどうか熱心に検討しましたが、どう

しても谷が一つ足りません。

「しかたがない、ここも良い土地と思っ

たがほかをさがそう。」

お坊さんは、あきらめて南の方へ去って

いきました。

そして、やっと理想の土地を見つけまし

た。それは都幾川村で、やがて慈光寺を建て

たお坊さんだといわれました。

一つ谷の足りなかったその場所は、今で

も「慈光平」と呼ばれ、二・三カ所山の上

が平になって屋敷あとと思われる場所や、

焼いた土器のカケラなどが時おり出てきま

す。

※慈光寺は、一、三〇〇年前慈光大師に

よって開かれた寺といわれています。

### 十三、尻あぶり(上)

ある年のことです。岩殿山に、周辺の村を荒らしまわる大蛇がすみついてしまいました。岩殿山の麓の小さな村にも、大蛇はおりてきました。

ある日、ごん介の畑の作物全部が荒らされてしまいました。ごん介は、くやしにくくやしくてしかたがありませんが、ひとりではどうすることもできないので、村の人たちに相談しました。

「村の衆、わしの家では、きのう大蛇に畑のものみんなあらされてしまったわい。」

と、泣き泣きいいました。そこへ、よしべえがやってきて

「ごん介、わしの家でもやられた。いったいどうしたらよかんべえ。」  
といいました。

村人たちは、みんな困ってしまいました。しかし、どうすることもできません。毎日のように大蛇は村のあちこちをあらし回りました。

ちようどそのころ、天皇の命で坂上田村麻呂という将軍が、関東・東北の蝦夷征伐のため、遠く東北へ向かう途中

たまたま岩殿山の近くの村で一夜をすごすことになりました。

これを聞いた村人たちは、田村麻呂の陣屋に行つて、声をそろえて

「田村麻呂さま、わしらの土地は、岩殿山にすむ大蛇に荒らされて、みんな困っています。どうか大蛇を退治してください。」

とお願ひしました。

田村麻呂は、村人たちのために大蛇を退治することにして、きつそく大蛇を見つけて出かけました。

## 十四・尻あぶり(下)

岩殿山の大蛇を追って、遠くまでやって

きました。しかし、そこで大蛇を見うしな

ってしまい、田村麻呂はしかたなく、そこ

で野宿をして一夜をあかすことにしまし  
た。

たいへん寒い夜だったので、麦わらを燃

やして暖をとりました。

その夜半、六月一日(旧暦)に大霜がお  
りました。

朝、目覚めて、あたりをながめまわすと、

何と、大蛇のおつたあとが、くつきりと霜

の上についているではありませんか。

「これはさい先がよい。よし、この地を霜の

里としよう。」

といて、そのあとを追い、ついに岩殿山で

大蛇を退治しました。

村人たちは、たいへん喜びました。そこ

でごん介は村人たちに、

「おい、みなの人、今夜は田村麻呂さまを

お迎えしてお祝いをしようじゃないか。」

といました。みんな大賛成です。さつそ

く村人たちは、田村麻呂を捜しに行きまし  
た。

しかし、もうどこにもいませんでした。

すでに東北へ出かけてしまったのです。

村人たちは、たいへん残念がりました。

そこで、村人たちは田村麻呂に感謝の意を

あらわすために「尻あぶり」という行事を

することにしました。旧六月一日の朝早

く、庭先で家族全員で麦わらを燃やし、背中

をあぶりながらおむすびを食べ、朝食を

します。

これは、田村麻呂が大蛇退治の折、麦わ

らを燃やして暖をとったという古事にちな

んでいます。この行事は、昭和初期まで続け

られました。

## 十五 西光寺の不思議 (上)

これは、西光寺の住職さんから聞いたお話です。

今から約七十年くらい前のことです。寺

の裏に大きなかし、もみじ、すぎの木があ

りました。そこは、とても涼しくて、休む

のにちょうどよい場所なのでお茶を飲んで

ひと休みする人たちがよくいました。しか

し夜になると暗くきみしい、何となくうす

気味悪い場所に代わり、人も近づかなくな

ります。

ある晩、隣の家の人<sup>いへ</sup>が寺に水<sup>みず</sup>をもらいに

来ました。裏門の所<sup>ところ</sup>まで来たときです。持

っていたちようちんの火<sup>ひ</sup>がスーと高く昇<sup>のぼ</sup>っ

ていって、そこにある一番<sup>いちばん</sup>大きな、すぎの木

のてっぺんで、ちよろちよろと燃<sup>も</sup>えはじめ

ました。おどろいた隣<sup>となり</sup>の人は、いちもくき

んにお寺<sup>てら</sup>へ逃げ込んで行<sup>い</sup>きました。

また、あるときのこと、青山<sup>あおやま</sup>の円光寺<sup>えんこうじ</sup>の人<sup>ひと</sup>

が、西光寺<sup>さいこうじ</sup>で集<sup>あつ</sup>まりがあるので出<sup>で</sup>かけて来<sup>き</sup>

たところ、時間<sup>じかん</sup>をまちがえたらしく、だい

ぶ早く着<sup>つ</sup>きました。そこで、裏門<sup>うらもん</sup>のところ

に腰<sup>こし</sup>をかけ、一服<sup>いっぷく</sup>していると、すぎの木<sup>き</sup>の  
てっぺんのほうで

「だれだー」

と、どなる声<sup>こゑ</sup>がしました。その人<sup>ひと</sup>はこわく  
なって、

「私<sup>わたし</sup>はこういうもので、これから西光寺<sup>さいこうじ</sup>に  
用<sup>よう</sup>があつて出<sup>で</sup>かけていくところです。」

と答え、西光寺<sup>さいこうじ</sup>にかけ込んで行<sup>い</sup>きました。

また、寺<sup>てら</sup>の裏<sup>うら</sup>に井戸<sup>いど</sup>がありました。

むかしは、本堂<sup>ほんどう</sup>が山<sup>やま</sup>にくっついていまし  
た。

ある晩<sup>ばん</sup>のこと、屋根<sup>やね</sup>に大きな石<sup>いし</sup>がころが

り落ちて、井戸<sup>いど</sup>の中<sup>なか</sup>に「ボチャーン」と入<sup>はい</sup>っ

たような物音<sup>ものおと</sup>がしました。

## 十六・西光寺の不思議（下）

寺の人はおどろいて井戸をのぞきに行きました。しかし、井戸の水面は波ひとつなく、シーンとしています。何も落ちたようなようすはありません。寺の人は、首をかしげながら、家の中に入って行きました。

また、ある晩も寺の物置で

「ウーン、ウーン」

と、人が苦しそうなうなる声が聞こえてきました。

寺の人が、こじきが病気でうなってもいるのではないか、かわいそうに、と思い見に行きました。

隅から隅まで探したけれども、やはりだ

れもいません。あきらめて外へ出ると、また同じようなうなり声が聞こえてくるのです。

そんなことのくりかえしが何日か続きました。

また、夜になると池のふちに、

「どーん、どーん」

と何かがぶつかる音がし、それが軒下の鐘にひびいて、なんともいえない不気味な音

となって聞こえてきます。

ある人がいうには、子どもがその池でおしっこをしたのを、池に祀られている弁天さまがおこっているのだろうということでした。

そこで、お祈りをしたら、その後、気味悪い音はしなくなりました。

これらのできごとは、西光寺の周辺がひらけていくうちに、なくなったということ

ですから、たぬきかきつねのしわざだったのだろうと、住職さんは話されました。

## 十七. 子育て地蔵

おがわまち しもよこた  
小川町の下横田に、「寺のうしろ」という  
所ところがあります。

じゅうにがつ ひ ぜんこうじ  
十二月のある日、善光寺が火事になりま  
した。その時、村人たちはお寺の中にお地蔵  
さまが祀まつつてあるのに気づき、何人かの人  
たちが燃もえているお寺の中に飛び込んでお  
地蔵さまを運び出して、川の中へ投げ込み  
ました。

かじ むらびと  
火事の後としまつでいそがしかった村人  
たちは、お地蔵さまを川の中へ投げ込んだ  
ことなど、すっかり忘れていました。

なんねん ひ  
何年もたったある日のことです。

たう いなほ  
田植えもすつきりすみ、やがて稲穂のみ  
のる季節きせつとなりました。

つづ かわ  
そのころ、あまりひでりが続いたので、川  
の水も底そこをついて、ちよろちよろ流れるあ  
りさまでした。

はたけ たがや しやうべえ  
畑を耕たがしていた庄兵工さんが、つかれ  
たので一服いっぷくしていると、河原かわらで何か光ひかって  
います。それで、いそいでそこへ行い行って、

ほ  
掘ほつてみました。そこには、なんとお地蔵さ  
まがおられるではありませんか。

かじ なか  
あの火事かじのとき、川の中へ投げ込まれた  
まま忘れられていたお地蔵さまです。

しやうべえ むら ひと  
庄兵工しやうべえさんは、それから村の人たちを呼  
んできて、お地蔵さまを掘ほり出してお祀まつり  
しました。子どもたちが、じょうぶに育そだつ  
ようと、子育て地蔵こぞだ じぞうと名なをつけ九月  
二十三日にじゅうさんにち きゅうれき（旧暦）に、だんごを作つくって備そなえ  
ることになりました。

## 十八・ひじり地蔵

むかし、むかしのことです。上横田とい  
うところに、おみつという娘さんがおりま  
した。やつとおむこさんがみつかり、五日後  
にお式をあげることになりました。  
ところが、おみつさんは、なんだかわか  
らない熱病にかかり、うなされていまし  
た。お母さんたちは困ってしまい、物知り  
のおたねばあさんに相談しました。

「娘の病をお式までに治すには、どうし  
たらいいでしょう。」

「ふむ。それはむずかしい…。ひじり地蔵に  
お願いなされ。」お母さんは、病氣のおみつ  
さんを連れて、いそいでひじり地蔵にお参  
りにいきました。

「お地蔵さま、お地蔵さま、私の病氣を治  
してください。」

「娘の結婚式は五日後です。どうかよろし  
くお願いします。」

次の日も、また次の日もひじり地蔵にお  
参りしました。

式を明日にひかえた日、「お地蔵さま、

明日はいよいよお式の日です。どうか病を

なおしてください。」おみつさんとお母さん  
が、おがんで立ち上がろうとすると、どう  
でしょう。お地蔵さまの頭がぴかっと光つ  
たのです。と同時に、

「おみつよ、私の手のひらのこの露を一滴  
とって、口びるをうるおすのじゃ。よいか。」  
と声がありました。見ると、お地蔵さまの手に  
は、大きな露玉が一つ、太陽の光をうけて  
キラキラ光っているではありませんか。お  
みつさんはすぐに、「はい、お地蔵さまあり  
がとうございます。」と言って、お地蔵さま  
がおっしゃったとおりに行きました。

今日はお式の日。おみつさんは、すつか  
り元気になりました。「さあ、お式の前にお  
地蔵さまにお礼にまいりましょう。」お母さ  
んに連れられてお礼に行きました。

## 十九. えんのぎようじや (上)

ズシン！ ズシン！ ゴウ、ゴウ…突然  
の地震です。山々がたてに波をうっている  
す。畑仕事をしていた男も女も、くわを  
投げ捨てて叫びます。

「地震だ！竹やぶへ入れ。赤ん坊は大丈夫  
か。」

「わああ、きやあ」  
「コケコッコ」  
「ヒーン、ヒーン」

動物たちも大騒ぎです。下里村は、ハチの巣  
をつついたようなありさまです。

やっと地震はおさまりました。そんな長  
い間ではないのに、竹やぶや押し入れの中  
でかくれていた人たちは、とても長く揺れ

ていたように思われました。そして、さっ  
きの騒ぎがウソのような静けさがもどって

きました。かくれていた人々は、しばらく  
はじっとしていました。それから口々に、

「おい、さっきの地震はすごかったなあ。」  
「田んぼのどじょうまでおどっていたぞ。」

でもなんか変な地震だったよなあ。「まるで、  
大男でも歩いたみてえな調子だった

よ。」「それにしてもおっかなかったよ。お  
らなんか声もでなかったよ。」と言ひ合いま  
した。  
しばらくして、こんどはグオー、グオー  
という音が聞こえてきました。下里の人た  
ちは気味悪がって、誰も野良へ出かけよう  
としませんでした。夜がふけましたが「グ  
オー」という音は消えませんでした。次の日  
も、やっぱり「グオー」という音がしまし  
た。村人たちは、家の中でじっとしていま  
したが、べんぞうさんだけは、畑に出かけ  
ていきました。

## 二十. えんのぎようじや (下)

次の日も「グオー」という音はやみません。地震のあった日から三日間も、その音は続きました。村人たちは気味悪くてたまりませんでした。

村の人たちは、いつのまにか一つの場所へ集まって、話し合いを始めました。

「なあ、どうもあの音は、腰越のむこうから出ているんじゃないかなあ。」「うん、おらもそう思っただ。」「おらも。」「んだ、んだ。」「だれか腰越のほうへ行ってみていいよ。」「おらやだ。」「おらもだ。」みんなだまってしまいました。

「そうだ、べんぞうにいかせべー。」話はいっぺんにまとまり、べんぞうが行くことになりました。

べんぞうさんはあまり行きたくありませんでしたが、しかたなく、とぼとぼ歩き出しました。べんぞうさんは腰越を越え、古寺へいきました。

ズシン！ ズシン！ 音がいちだんと強くなりました。

「オオオー！ アアア！」

べんぞうさんは、言葉にならない言葉で叫

んでいました。べんぞうさんは、なんと山より大きい大男を見てしまったのです。

「だれだ！」

鼓膜がやぶれるような、いや、地面まではりさけそうな声がありました。ズシン！ ズシン！ とまた歩き出しました。べんぞうさんはおどろいて、ペタリとすわりこんでしまいました。大男は、「いまましい石ころめ！」と言いながら立ちどまり、ゲタの齒にはさまった石を、ポーンと勢いよくけり上げました。石ころは、ずうーつとむこうのほうまで飛んで行ってしまいました。

大男は「ズシン、ズシン！」と足音をひびかせ北へ北へと行ってしまいました。べんぞうさんは、いちもくさんに村へ向って走り出しました。

そのころ、下里ではべんぞうさんを心配して、村の人たちが走りまわっていました。べんぞうさんが帰ってきたときです。べんぞうさんは、もう息もたえだえに、「えん・の・ぎよう…じゃ…が…げた…のあいだの

石：」と言っただけで、息をひきとってしまいました。

べんぞうさんの話と、飛んできた大きな石をむすび合わせて、村人たちは、「きつと、

えんのぎようじゃという大男が、腰越のほ

うの山にやってきたにちがいねえ。あの

地震も、飛んできたあの石も、えんのぎよ

うじゃのしわざなんだんべえ。」「それに、

べんぞうの話からすると、その石はゲタの

歯にはさまってたんじゃあねえか。」「それ

にしてもあれが、ゲタの歯にはさまった石

かいのお。そんなに大きな男だったんだん

べえか。」と言いました。

## 二十一 重忠公のお墓

「五輪六基」というのをご存じですか。

これは、鎌倉時代を中心としてつくられた

お墓の型です。

小川町(上古寺)にも頼朝が鎌倉幕府を開

いた際、活躍した武士の一人である畠山

重忠の立派な五輪六基のお墓があるんです

よ。

畠山重忠は典型的な武蔵武士で、人々か

らの信頼の厚い人でした。しかし、北条氏

にねたまれて、二俣川(神奈川県)で、北条

義時に討たれてしまいました。

重忠には、重慶(しげよし)というまだ

小さな子どもがいました。重慶は、そのと

き宇都宮(栃木県)藩にあずけられていま

した。むかし、偉い武士の師弟は、大きな藩

に人質にとられ、いろいろなことを学ぶの  
でした。

北条氏はその小さな重慶さえも殺そう

と、宇都宮藩に、

「重慶を殺してしまえ。」と指令しました。

「はい、殺しました。」宇都宮藩は討つに

しのびず、返事だけ北条氏にしました。こ  
のような時は、その首を出すのが常でした。

そこで、鎌倉の北条氏は「重慶の首をよ

こしなさい。」とまた使いを送りました。

そんな間に重慶は小川町の上古寺のお

じさんの弟の所へ身を寄せました。この

人は、小久保重遠というお寺さんで、隣の

都幾川村にある慈光寺にいつも出入りして

いました。

やがて、重慶は上古寺から慈光寺へ移り

ました。ここなら北条氏の追つてがきても

大丈夫です。

お寺の弟子になってしまえば命は助か

ることになっていました。重慶は慈光寺の

住職となり、お父さんのお墓をつくって

菩提をとむらいました。このお墓は、重忠

の遺髪を埋めたものです。

## 二十二 七井戸

むかし、源頼朝が慈光寺へ行く途中、青山の慈眼寺というお寺にたちよりました。

一晩休んで、頼朝は慈光寺へ向かいました。だが、そこまで連れてきたお供をそこに残して行きました。お供は炊事をするために井戸を掘ることになりました。そして、とてもよい水のである、かれることのない場所を見つけたしました。それも二つ。

杉の下にある井戸を男井戸といい、山の中腹にある井戸を女井戸と呼びました。

ほかに、あちらこちらで五つも井戸を掘りました。前に掘ったのと合わせて七つ。

いい水が出て、いつまでもかれることなく使えるこれらの井戸を「七井戸」とよびました。いまでも七井戸のいくつかは、立派に井戸の役目を果たしています。

## 二十三 池のつりがね

むかし、むかし、高谷のお寺に大きなつりがねがありました。ある日、近くのお百姓さんが畑仕事をしていたときのこと、その大きなつりがねが、ゴロンゴロンと音がってくるではありませんか。そして、つりがねは「ドボン」と大きな水しぶきをあげて、池に落ちてしまいました。

これは大変と、そのお百姓さんは、みんなに知らせて回りました。村の人たちは、早くつりがねを池から引きあげようと、長くてじょうぶな縄を持って池にでかけました。

みんなで力を合わせて引きましたが、ぜんぜん動きません。不思議に思って、池の中をのぞいてみました。

なんと、大きな大蛇がつりがねにからみついているではありませんか。それで、いつくら引っぱっても動かなかったわけですよ。それ以来、誰もつりがねを引きだそうとする人はいません。

## 二十四・もみじ山 やま

むかし、むかし、ある地方ちほうのお殿さまが

江戸えどへ行く途中とちゆう、下里しもざとを通りかかりました。

お殿さまが、ふと目を山やまの方ほうに向けま

と、それはそれは大きくて、立派りっぱな木があ

りました。お殿さまは、その木きにたいへん

驚おどろいて、近くちかにいた村むらの人に、

「あれはなんの木きじゃ。」

と指ゆびさしたところ、農民のうみんは、

「お殿さま、あれはもみじの木きでございま  
す。」

と答こたえました。

お殿さまは、今いままでにそんな大おおきなもみ

じの木きを見たことがなかったのです。そし  
て、

「それでは、あの山やまをもみじ山やまと名なづけよ  
う。」

と言いわれました。

それからのち、下里しもざとの人々びとはその山やまを、

もみじ山やまと呼よんでいます。

## 二十五・高谷 こうや

むかし、川越かわごえ、松山まつやまの城しろが落ちたとき、

そのときむらいたちは、この小川おがわの地ちや

秩父ちちぶの山地さんちへ流ながれてきました。

ある時とき、小次郎こじろうという落おち武者むしやが、小川おがわの

山地さんちへ流ながれてきました。そのころは、山やまは荒あ

れほうだいでした。小次郎こじろうはその地ちへ住すみ

つき、山やまを開拓かいたくしていきました。自分じぶんで開拓かいたく

した土地とちだけ自分じぶんのものになるとい

で、小次郎こじろうはいっしょうけんめい働はたらき、

土地とちをふやしていきました。

そのうち嫁よめをもらい、幸福こうふくにくらしま

した。まわりの人ひともそれをみならって、い

っしょうけんめい働はたらいたので、その土地とち

はみるみるうちによい土地とちになっていきま  
した。

それで、ここを荒野こうやという地名ちめいから「高

谷や」という名なに改か名いしたとのこと